

きたまちアンケート調査結果報告書

2021年8月

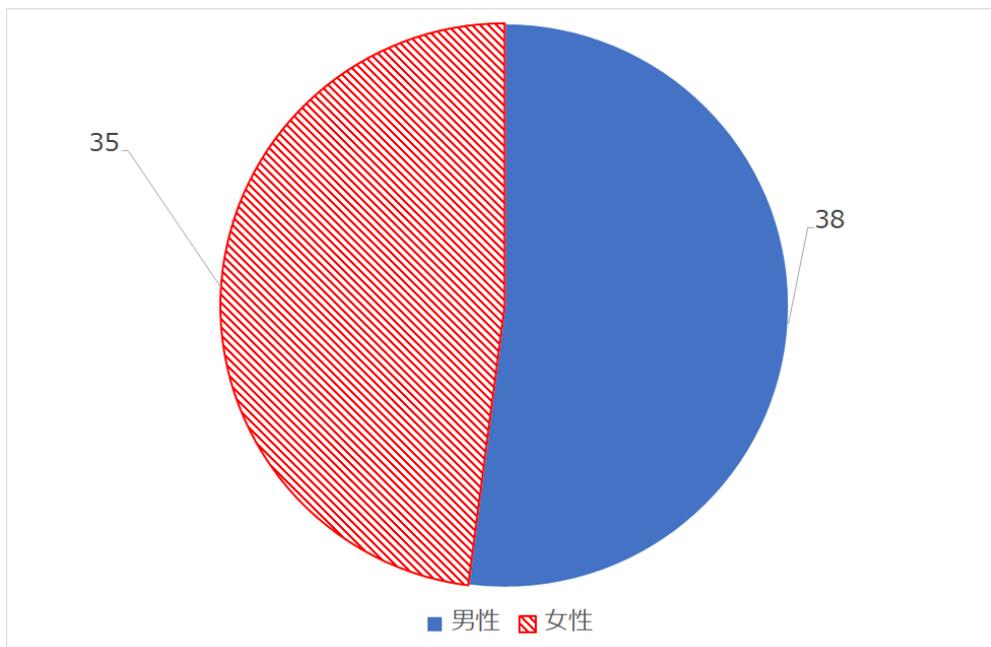
きたまちアンケート調査結果について

2021年8月
大阪経済大学 経済学部
教授 下山 朗

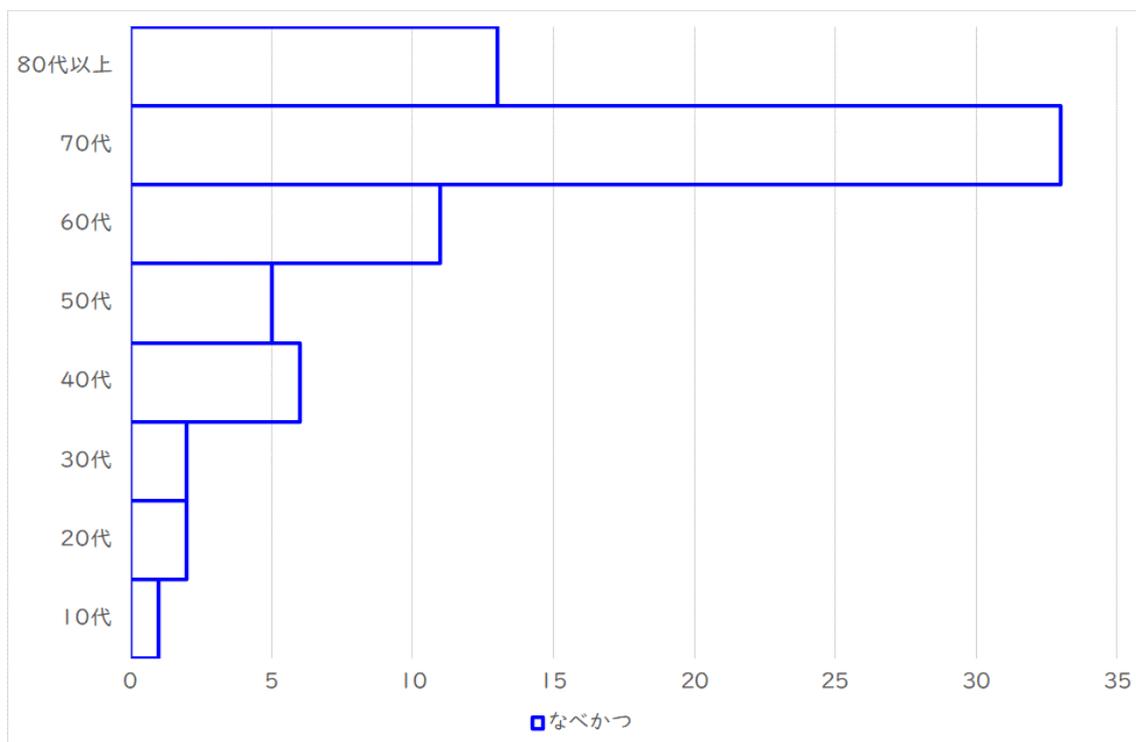
2021年6月に、きたまち居住者に対して、きたまちの魅力、課題についてアンケートを行った。アンケートでは、回答者の一般的な属性のほかに、きたまちの観光スポットの認知状況、きたまちの魅力、魅力向上のための課題等に関する項目について質問している。詳細については、本報告書の最後部にアンケートシートを添付しているのので、そちらを参照いただきたい。本結果報告書では、個人情報保護の観点から、その主要な回答部分について合算して集計したのを見ていく。

【属性について】

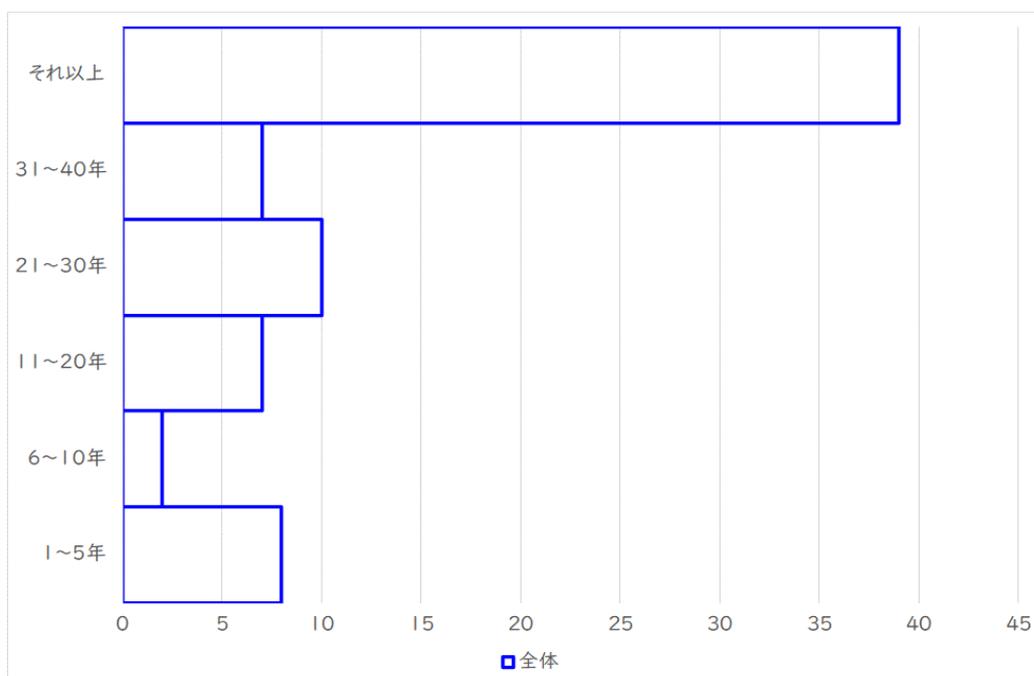
① 性別



② 年代



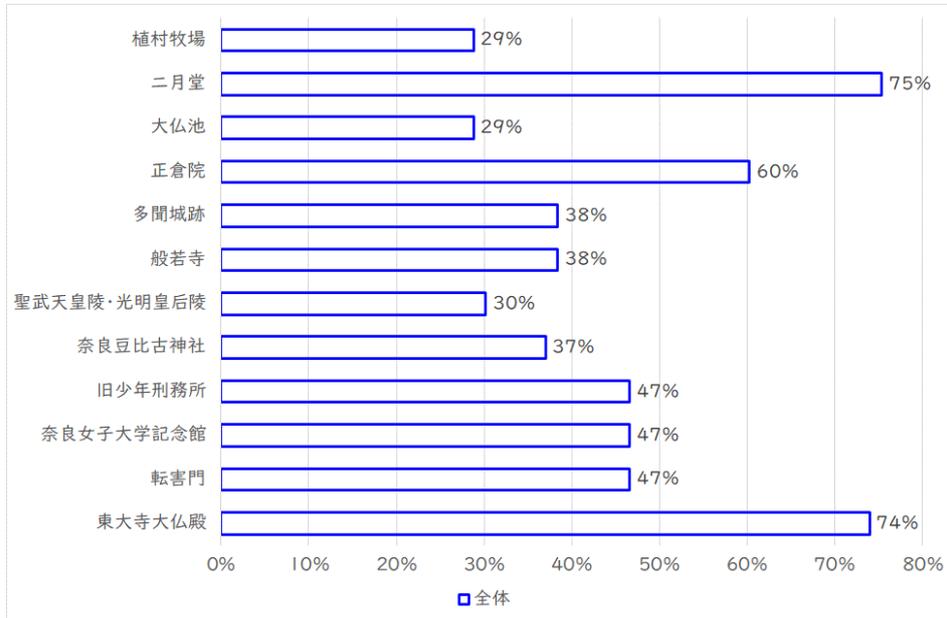
③ 滞在(かかわっている)年数



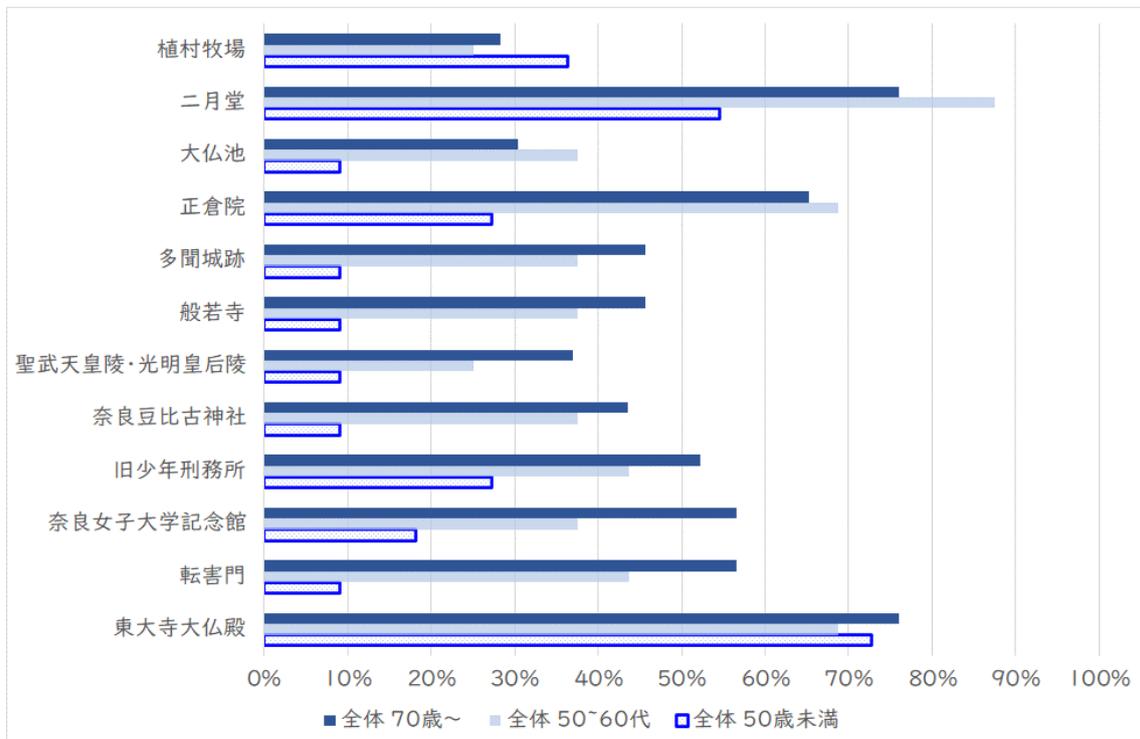
本アンケートは、きたまちの居住者および案内所等きたまちのまちづくりにかかわる 73 名に回答いただいた。その結果についてみていくと、性別については男女ほぼ同程度の回答であった。年代については、70 代の回答者が最も多く、次いで 80 代以上、60 代となり、高齢者を中心とした回答群になっている。滞在年数については、40 年以上の長期にわたってかかわっている人が圧倒的に多い。

【分析結果】

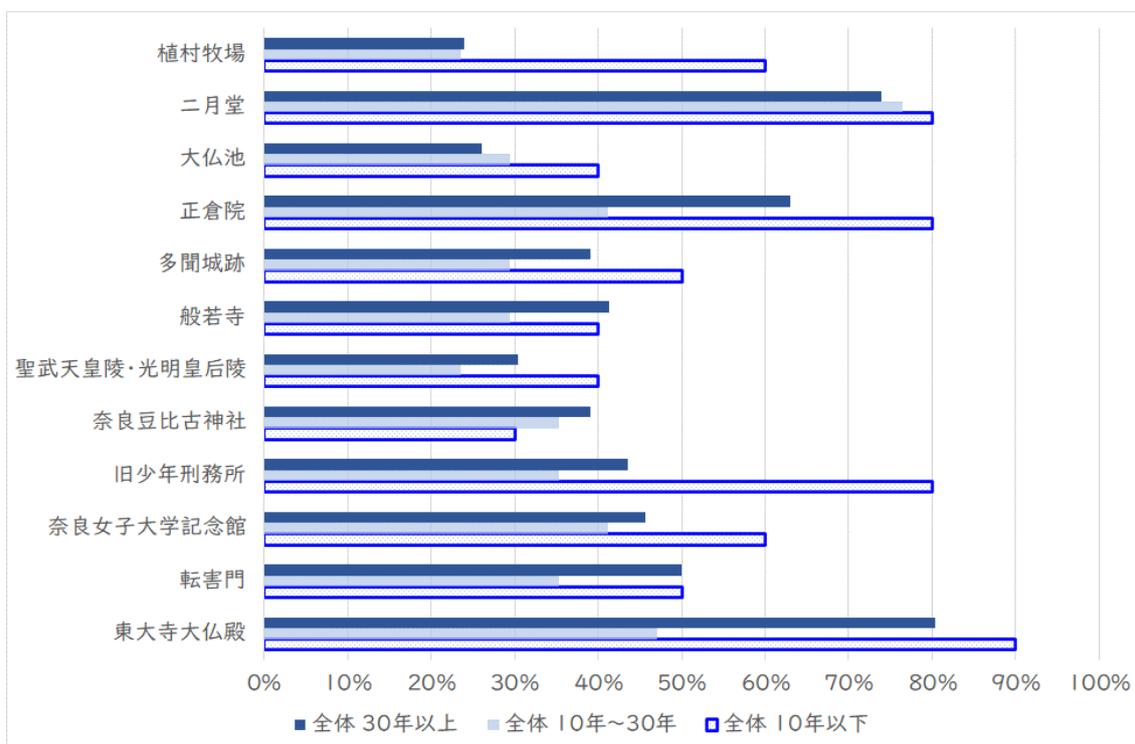
① 観光スポット



①-A 年代別比較



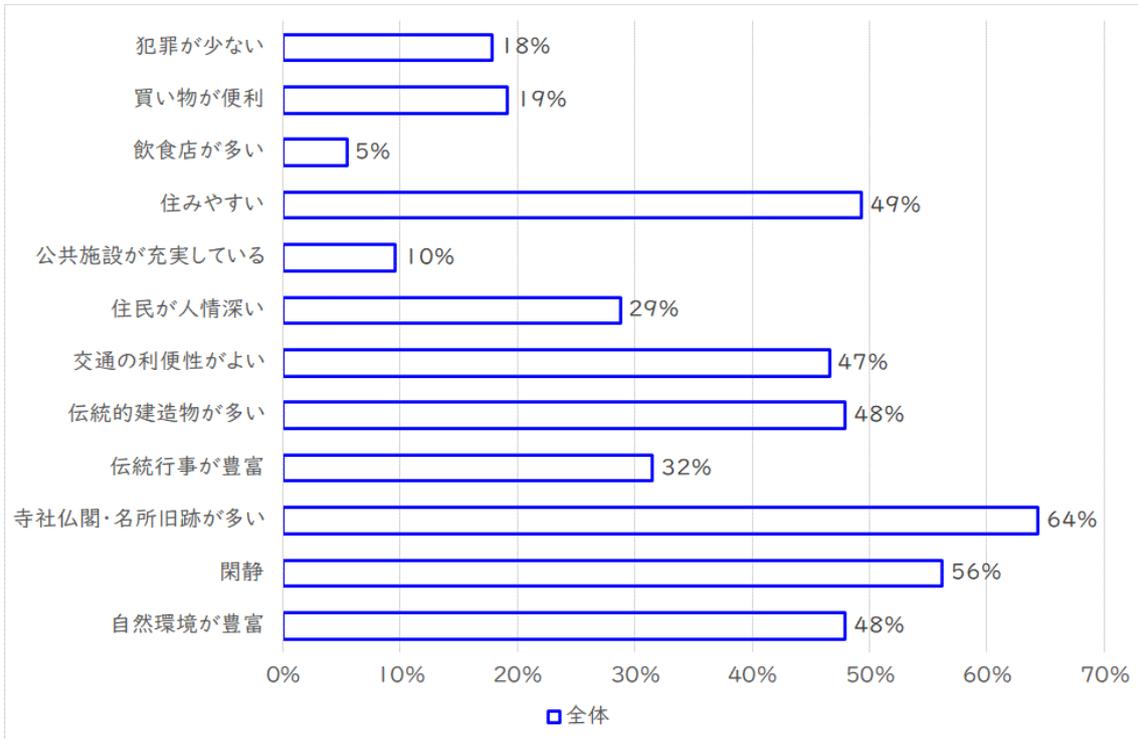
①-B 滞在(かかわっている)年比較



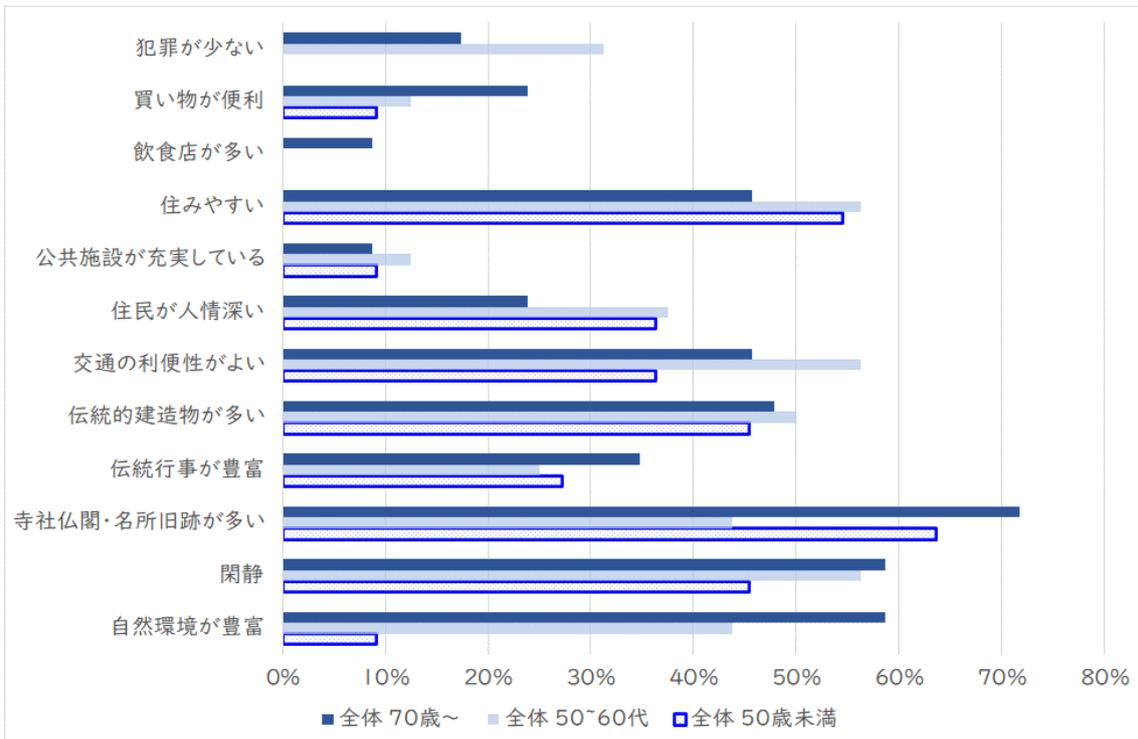
きたまちに存在するいくつかの地点について、観光スポットとして認識しているかどうかの設問の結果についてみていく。全体の結果を見ると、二月堂(75%)、東大寺大仏殿(74%)が突出して高く、ついで正倉院(60%)となっている。これらの3地点は、比較的知名度の高い東大寺に関連するものであり、一般的な観光客の認識と一致すると言えらる。その他の項目についてみると、植村牧場、大仏池、聖武天皇陵・光明皇后陵の回答率が低いものの、それぞれ29%、29%、30%と1/4以上の回答があり、きたまちにかかわる人にとって、本調査で挙げた各地点は観光地として認識されていることが分かった。

次に、年代別に違いがあるのか、滞在(かかわっている)年数によって回答が異なるのかについてみていく。年代別にみると、多くの地点において年代が上がるほど、各地点の観光スポットとしての認識が上がる傾向が見て取れた。植村牧場については、むしろ年代が若いほど高い逆の結果である。また、東大寺大仏殿ではどの世代であっても高い比率であり、観光スポットとしての高い知名度を誇っていることが分かる。滞在年数別の特徴についてみていくと、年代別の結果と異なり、滞在(かかわっている)年数が短い人ほど、多くの地点を観光スポットとして認識し、滞在年数が長くなるほど、その割合が下がる地点が増える傾向が見て取れる。その理由として、回答者の一定割合として案内所等の活動にかかわっている人が含まれることから、それらの人々がきたまちにかかわるきっかけとして「きたまちの魅力」をとっても高く評価していることが考えられ、その結果これらのスポットの評価は相対的に高くなっていると考えられる。

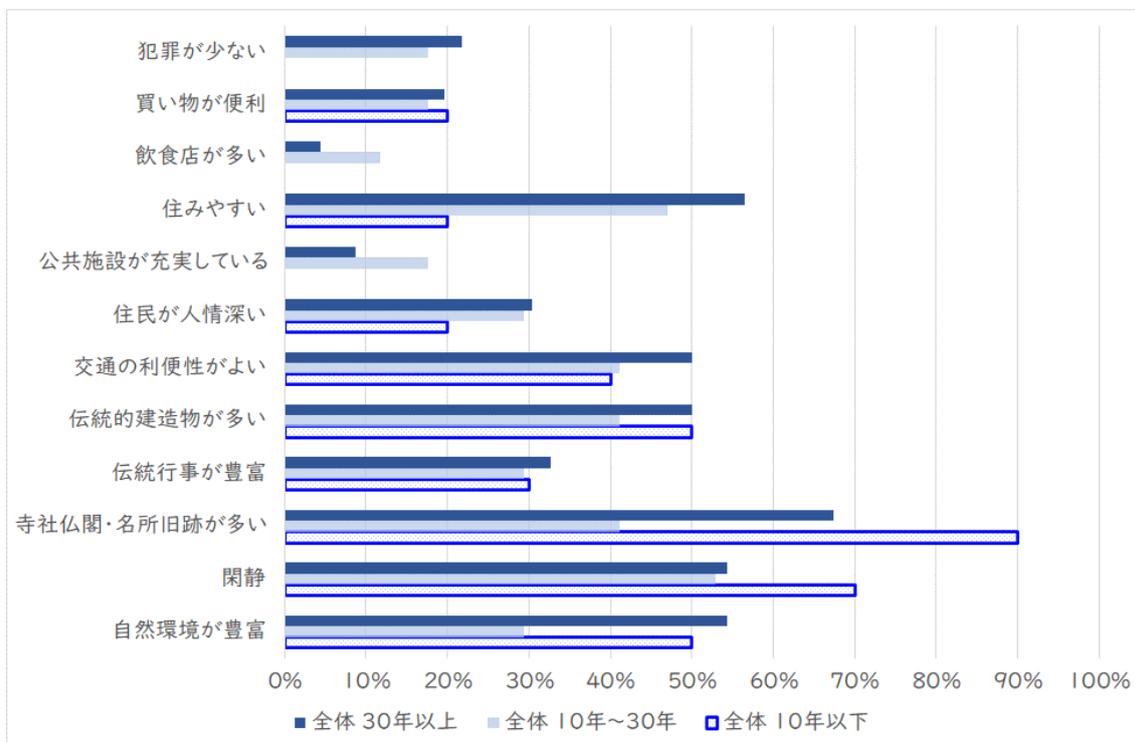
② きたまちの魅力



②-A 年代別比較



②-B 滞在年比較

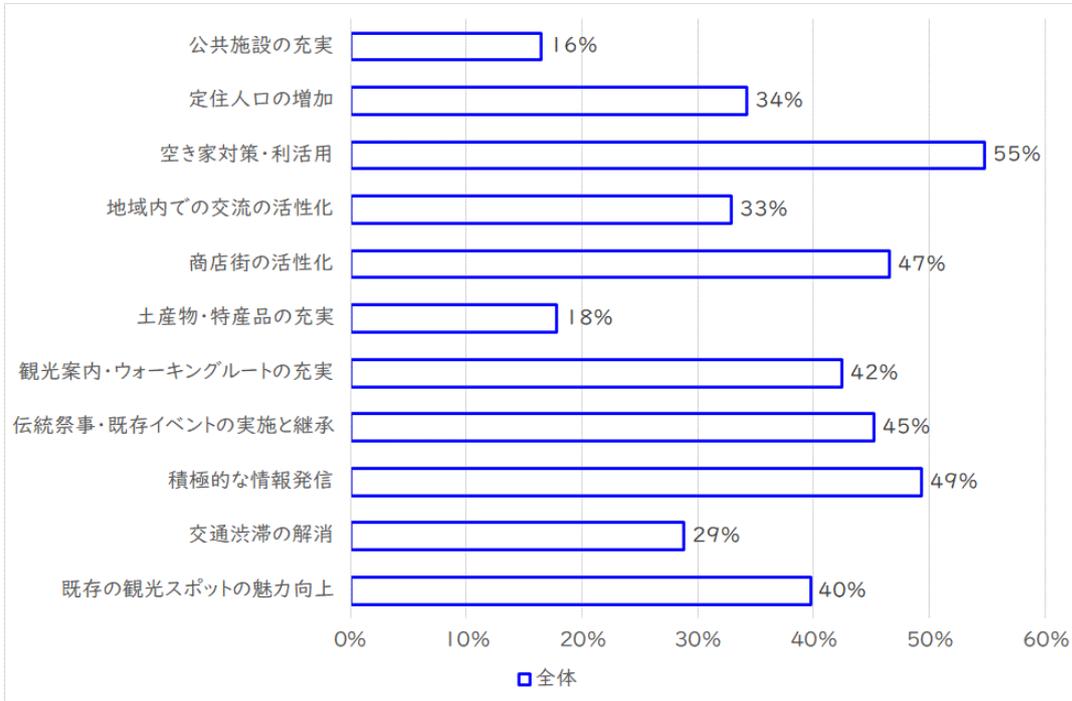


きたまちの魅力についての結果を見ると、寺社仏閣・名所旧跡が多いが最も高く64%、ついて閑静であるが56%、住みやすいが49%という結果となった。一方、回答が少なかったものとして、飲食店が多いが5%、公共施設が充実しているが10%となっており、それらに対する課題があると認知しているように思われる。

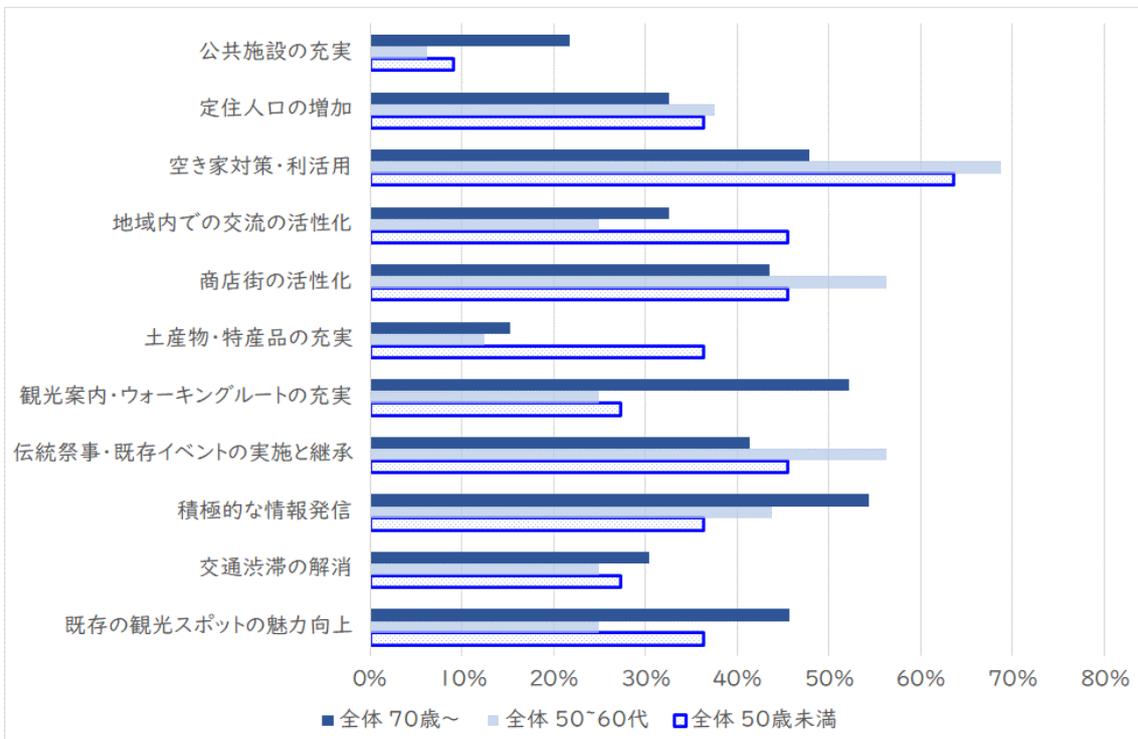
次に、年代別グループ別の特徴についてみていくと、犯罪が少ない、買い物が便利、飲食店が多い、自然環境が豊富などは年代が高いほど回答率が高い傾向がみられた。一方滞在年数別にみると、寺社仏閣・名所旧跡が多いや、閑静であるなどは、年数が短い人ほど回答率が高い結果となった。

これらの結果は、きたまちへのかかわり方によって回答に多くの差があると考えられ、居住者であれば居住に関して魅力と同時に課題も感じると考えられ、案内所としてかかっている場合は逆に観光地としての魅力や課題についても意識がいくと考えられる。そのため、今後はそれらを切り分けた居住者アンケート、観光者アンケートについて分析していくことが望ましい。

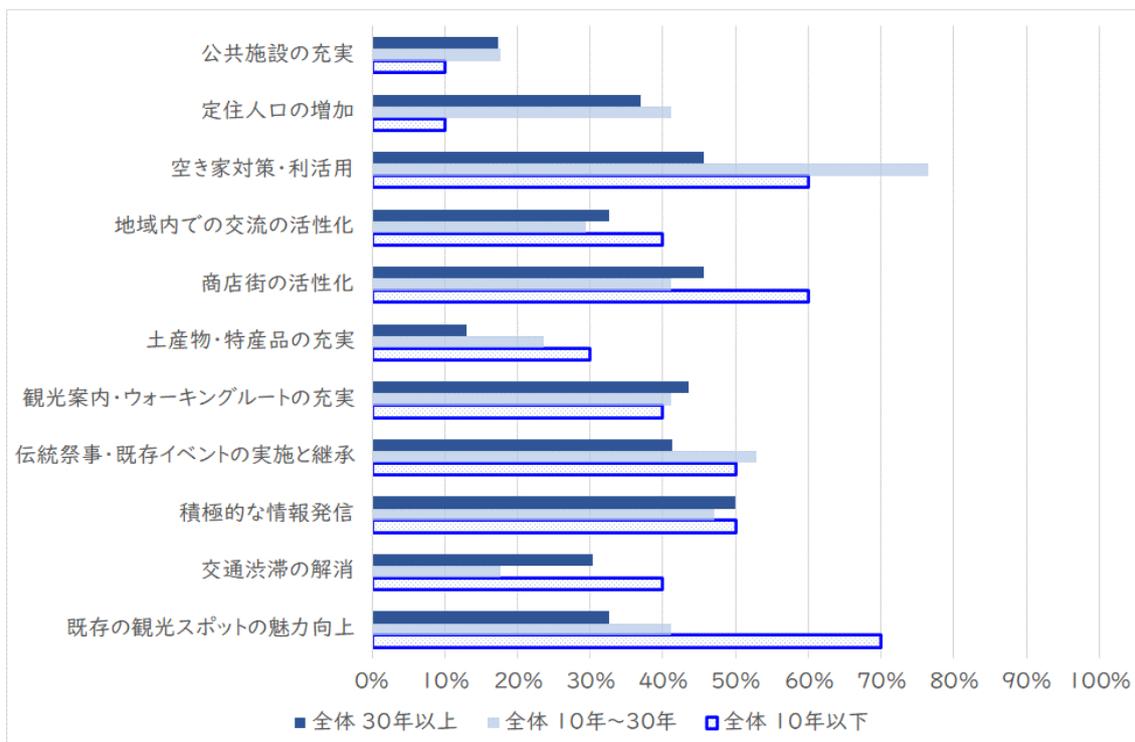
③ きたまちの課題



③-A 年代別比較



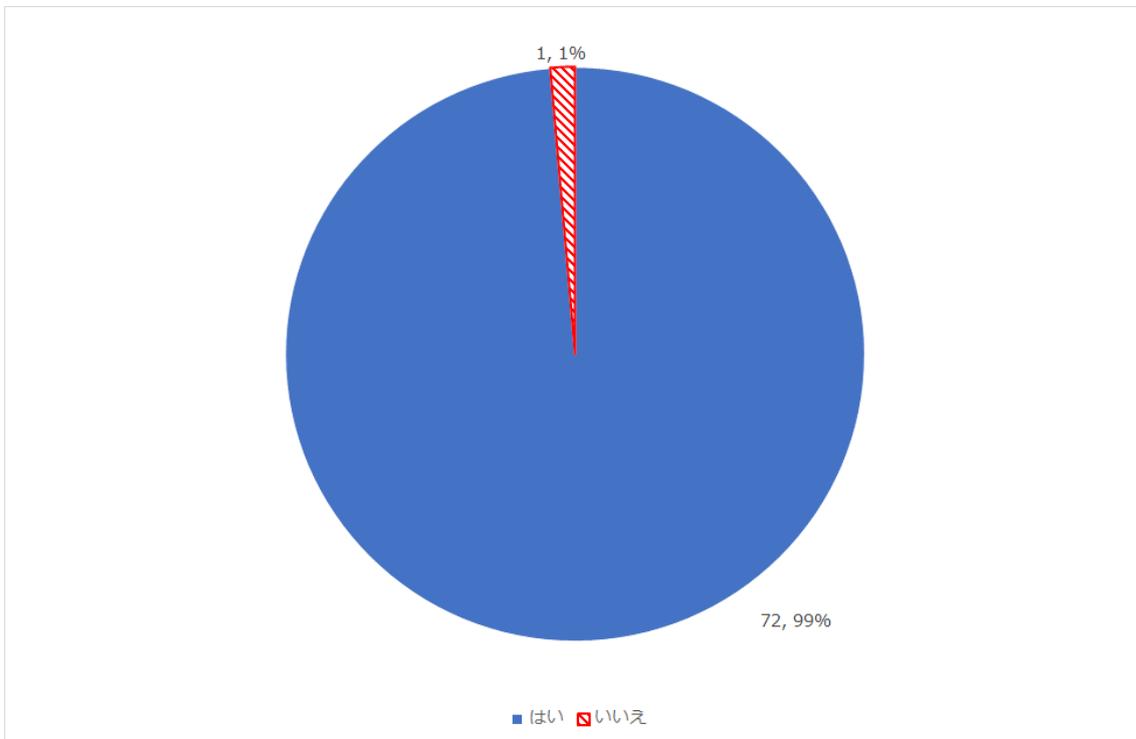
③-B 滞在年比較



きたまちの課題についての結果を見ると、空き家対策・利活用（55%）、積極的な情報発信（49%）、商店街の活性化（47%）となっており、その他の項目でも30%以上を回答しているものが多い。きたまちにおける課題の多さが挙げられる。特にこれらの上位3つについては、きたまちの「寂しさ」を表したものと考えられ、「にぎわい」をどのように取り戻すが主たる課題であるといえる。一方、公共施設の充実、土産物・特産品の充実等についてはあまり高くない。この結果は、きたまちでは観光地化を目指しているというわけではなく、伝統を維持しながら持続可能な街づくりを目指しつつ、地域の活性化を模索していることが推測される。

次に、年代別グループ別の特徴についてみていくと、際立って大きな差異は見られなかったが、土産物・特産品の充実は年代が若いほど高い回答率であり、逆に積極的な情報発信については年代が高いほど高い回答率であった。滞在年数別の特徴については、商店街の活性化、既存の観光スポットの魅力向上などは年数が短い人ほど高い回答率であった。

④ あなたは今後もきたまちに住み(関わり)続けたいですか。



きたまちへの居住(かかわる)意欲に関しては、ほとんどが意欲的な回答を示しており、きたまちの居住地(かかわる地域)としての満足度の高さを表していると考えられる。

【まとめにかえて】

きたまちの魅力と課題について、居住者、案内所等に係る人に対してアンケート調査より考察を加えてきたが、特徴的な点がいくつも見られた。

例えば、観光スポットとしては、東大寺に関連する大仏殿、二月堂、正倉院などは、きたまちを代表する観光スポットとして認知している人が多い結果だけでなく、その他のスポットについても一定程度回答がみられた。また、多くの地点において年代が上がるほど、各地点の観光スポットとしての認識が上がる傾向が見て取れる一方で、滞在（かかっている）年数が短い人ほど、多くの地点を観光スポットとして認識し、滞在年数が長くなるほど、その割合が下がる地点が増える傾向となった。

きたまちの魅力についてみると、寺社仏閣・名所旧跡が多いが最も高く64%、ついで閑静であるが56%、住みやすいが49%という結果となったが、きたまちへのかかり方によって回答に多くの差があると考えられ、居住者であれば居住に関して魅力と同時に課題も感じると考えられ、案内所としてかかっている場合は逆に観光地としての魅力や課題についても意識がいくと考えられる。そのため、今後はそれらを切り分けた居住者アンケート、観光者アンケートについて分析していくことが望ましい。

きたまちの課題についての結果を見ると、空き家対策・利活用（55%）、積極的な情報発信（49%）、商店街の活性化（47%）となっており、その他の項目でも30%以上を回答しているものが多くあり、きたまちにおける課題の多さが挙げられる。また、下位の結果も含めて解釈すると、必ずしも「観光振興を主軸としたきたまちの活性化」を期待しているわけではなく、居住地としてのきたまちの価値も踏まえた、地域の持続可能性を意識していることが強く見て取れる結果であった。

これらの結果は、きたまちの居住者を対象としたものではあるが、奈良県全体でも同様の課題があると推測される。奈良県は寺社仏閣・名所旧跡が多い魅力がある一方で、大阪や京都にも近接し居住地としての利便性も高い地域である。この二律背反的な要素を抱え、これらの両者に配慮した地域の活性化のための方策を推進していく必要がある。

最後に、本アンケートのご協力いただいたすべての皆様に感謝の意を表すとともに、本報告書に残された過誤はすべて筆者に帰することを申し述べさせていただきます。

2021年8月

大阪経済大学 経済学部

教授 下山 朗

a.shimoyama@osaka-ue.ac.jp

付表 アンケートシート様式

質問7：ご回答頂いた以外で、あなたが思うきたまちの魅力や課題をお聞かせください。

質問8：あなたは今後もきたまちに住み（関わり）続けたいですか。

- そう思う そう思わない

そう思わないと答えられた理由は何ですか。

ご回答ありがとうございました。